

(様式1)

大学院派遣研修報告書

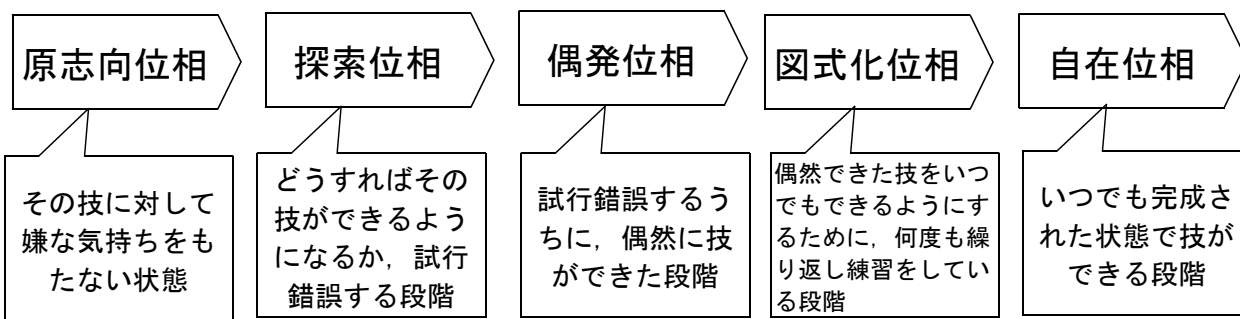
所属校	世田谷区立松沢小学校	氏名	安達 光樹
派遣大学院	東京学芸大学大学院	専攻・コース	保健体育
研究テーマ	小学校の器械運動の学習における技の習得に関する研究 －運動形成の五位相とその識別方法に焦点を当てて－		

I 研究の概要（研究目的・内容・方法・成果等）

<研究の目的>

本研究は、「運動形成の五位相」を小学校の器械運動の授業における技の習得段階を計る基準として取り入れるために、児童の学習している技の状態が形成位相のどの段階にあるのかを教師の側から明らかにする方法を検討することが目的である。この、「運動形成の五位相」は、金子明友が運動を習得する過程を5つの段階で表したもので、その概要は以下の通りである。

図1 運動形成の五位相と各位相の意味



<先行研究の検討>

先行研究の検討では、マイネルの三位相と金子による運動形成の五位相の違い、三木による運動形成の五位相の解釈、朝岡らによる形成位相の識別方法に関する研究、佐藤によるできない現象の志向分析的視点の研究について検討が行われた。この結果、小学生を対象にして形成位相の変化を識別する方法を明らかにすることが、本研究におけるオリジナリティであり、その方法については運動の外的経過ではなく、児童の内面に踏み込んで行うことが必要であることが分かった。

<研究の方法>

これを受けて、児童の学習している技の状態が形成位相のどの段階にあるのかを教師の側から明らかにするために、研究対象とする技の選定と形成位相の限定が行われた。技の選定については、研究対象となる6年生の学級の児童に対して、マット運動の技のできばえの調査とできるようになりたい技の調査が行われた。その結果、できない人数の割合が多く、かつできるようになりたい人数の割合も多かった「伸膝前転」が研究対象とする技

表 1 本研究で作成された伸膝前転の形成位相の展開にともなう運動感覚能力の発生(仮説)

伸膝前転の形成位相の展開にともなう運動感覚能力の発生																										
①(志向性の存在) やりたい			②(体感能力の芽生え) なじめそうな気配を感じる			③(零点・遠近体感能力の発生) 移動が分かるような気がする			④(直感・統覚能力の発生) 良し悪しがなんとなく分かる			⑤(予感能力の発生) できそうな気がする			⑥(原初即興能力の発生) やったらできた			⑦(直感・統覚能力の向上) 良し悪しがはっきりと分かる			⑧(力動的修正能力の発生) 勢いと体の開きを同調させられる			⑨(先読み能力の発生) 技が終了した後に次の技にうつることができる		
原志向位相			探索位相			偶発位相			図式化位相																	
零点体感能力	遠近体感能力	気配体感能力	直感能力	予感能力	統覚能力	調和化能力	局面化能力	再認化能力	優勢化能力	リズム化能力	伝導化能力	弾力化能力	解消化能力	伸長能力	先読み能力	情況把握能力	原初即興能力	自在即興能力								
体感能力			直感能力			時空的修正能力			力動的修正能力			伸長能力			先読み能力			原初即興能力			自在即興能力					
体感能力			コツ創発能力						力動的修正能力			カン創発能力			即興能力			即興能力								

として選定された。形成位相の限定については、「できない」ところから「できるようになる」ところまでの間で、どのような運動感覚能力(キネステーゼ)が発生しているのかを探り、それを元に形成位相の識別を行うことから、原志向位相から図式化位相までが研究対象とする形成位相として限定された。

さらに、伸膝前転の形成位相が原志向位相から図式化位相と進んでいくのにもなって発生する運動感覚能力(キネステーゼ)について、仮説(表1)が設定された。そして、その仮説に基づいて運動感覚能力の発生を知るための質問紙(表2)が作成されたのである。

<授業実践の実際>

このような経過を踏まえて行われた授業実践では、伸膝前転を学習課題として選択した児童に対して、質問紙による調査とレポート記述による調査、指導者の観察と児童との会話、ビデオ撮影等が行われた。そして、すべての授業終了後に、伸膝前転を学習課題として選択した児童の中から、3名の児童が考察対象者として選定された。この、考察対象となった3名の児童について、質問紙による調査の結果を児童ごとにまとめた「回答結果集計表」が作成された。さらに、回答結果集計表の結果に基づく形成位相の展開の様子と、児童が記述したレポートの内容を概観するための表が作成された。そして、これらの考察資料に基づいて、児童ごとの形成位相の展開に対する考察が行われた。ここでは、教師の観察による形成位相の判断と、質問紙による考察結果の判断に違いがある箇所に絞って考

表2 本研究で作成された質問紙

記入した日： 月 日	名前
<p>今日、あなたが授業で「伸膝前転」をやった時のことを思い出して、下の質問の（ ）の中の当てはまるところに○をつけてください。</p>	
①	1. 今日「伸膝前転」を（・やりたかった ・どちらでもなかった ・やりたくなかった）
②	2. 「伸膝前転」をやっている時は、なんとなく （・気持ちよかった ・どちらでもなかった ・気持ち悪かった）
②	3. 「伸膝前転」をやっている時は、 （・怖くなかった ・どちらでもなかった ・怖かった）
③	4. 「伸膝前転」をやっている最中に、自分が前に移動しているのは、 （・はっきりと分かる ・何となく分かる ・まったく分からない）
③	5. 「伸膝前転」をやっている最中に、自分が回転しているのは、 （・はっきりと分かる ・何となく分かる ・まったく分からない）
④	6. 「伸膝前転」をやった後に、今やった「伸膝前転」がよかったかどうかは、 （・はっきりと分かる ・何となく分かる ・まったく分からない）
④⑦	7. 「伸膝前転」をやった後に、今やった「伸膝前転」で勢いがつけられたかどうかは、 （・はっきりと分かる ・何となく分かる ・まったく分からない）
④⑦	8. 「伸膝前転」をやった後に、今やった「伸膝前転」で体を開くことができたかどうかは、 （・はっきりと分かる ・何となく分かる ・まったく分からない）
④⑦	9. 「伸膝前転」をやった後に、今やった「伸膝前転」で膝が伸びていたかどうかは、 （・はっきりと分かる ・何となく分かる ・まったく分からない）
⑤⑥	10. 今、坂を下るマットの上で「伸膝前転」をしようと思えば、 （・できる ・できそうな気がする ・できない）
⑤⑥	11. 今、平らなマットの上で勢いをつけて「伸膝前転」をしようと思えば、 （・できる ・できそうな気がする ・できない）
⑧⑨	12. 今、上の11の状態から「伸膝前転」をすれば、「伸膝前転」ができた後に、すぐに次の技にうつることが （・できる ・できそうな気がする ・できない）

察が行われた。これは、教師の観察による形成位相の判断と質問紙を用いた形成位相の判断の違いについて、児童へのインタビューやVTRの分析によって、どちらが正しいか明らかにすることが目的である。この結果、教師の観察による形成位相の判断と質問紙を用いた形成位相の判断の違いが見られる箇所については、質問紙を用いた形成位相の判断が正しかったことが明らかにされた。

<研究の成果>

この結果、本研究で作成された質問紙を用いることによって、本研究者が担任する学級の小学校6年生の場合においては、伸膝前転を学習する際の形成位相の展開を識別できることが明らかにされた。このことによって、たまたまできただけの技を「できる」と判断してしまうような、教師の技のできばえに対する認識の不十分さや、児童の学習が中途半端で終わってしまうような問題に対して、質問紙を用いた形成位相の識別が解決のための手だてになる可能性が見いだせた。また、児童の運動感覚能力の発生を知ることにより、ある程度できるようになった児童に対しては、次の段階で必要とされる運動感覚能力を具体的な学習目標として示すことができ、学習障害に陥ってしまった児童に対しては、消失してしまった運動感覚能力の再獲得を目指させることによって、学習障害を克服することの可能性が見いだせたのである。

<今後の課題>

今後は、より体育授業に導入しやすい簡易な形成位相の識別方法の検討、児童にレポート記述をさせる際の記述方法に対する工夫、伸膝前転以外の器械運動の技についての質問紙の作成が、課題として残されている。

これらの課題の解決を通して、教育現場に本研究の成果を広めていくことが、今後の大きな目標となる。

II 学校等における研修成果の活用計画（授業活用・研修会計画など具体的に）

本研究の成果は、器械運動の授業においてより効果的に活用できると考えられる。そのため、器械運動の授業を行う際には、「運動形成の五位相」の識別を通して児童の学習が中途半端で終わらず、児童自身がよりよいできばえを目指していくような授業を行っていく。また、積極的に授業を公開し、本研究の成果を広めることとする。

また、長期休業などを利用して、校内研修会を開催し本研究の成果を広めるとともに、自身の指導力を高めていくこととする。

大学院派遣研修成果活用状況

所属校	世田谷区立松沢小学校	氏名	安達 光樹
派遣大学院	東京学芸大学大学院	専攻・コース	保健体育
研究主題	小学校の器械運動の学習における技の習得に関する研究 －運動形成の五位相とその識別方法に焦点を当てて－		
1 所属校での成果活用	<p>所属校における授業実践では、器械運動の授業において伸膝前転と開脚前転を学習課題として選択した児童に対して、質問紙による調査とレポート記述による調査、指導者の観察と児童との会話、ビデオ撮影等を行った。</p> <p>これまでの研究結果から、運動感覚能力を調べるための質問紙を用いることにより、児童の形成位相の判断ができることがわかっているため、伸膝前転と開脚前転を学習課題として選択した児童については、形成位相のどの段階にあるかを把握することができた。これにより、児童の技がたまたまできたものなのか、できると判断することができる状態なのかを判断しながら学習を進めることができた。さらに、できない児童に対しては、何が原因でできないのかをキネステーゼに求めることにより、その児童が本来身につけてくるべきであったが、身につけられていない動きやコツが明らかになり、できるようになるための指導が具体的にできるようになった。</p> <p>しかしながら、本研究の成果は、器械運動の伸膝前転に限定したものであり、器械運動の技全般に対応していくためには、今後の継続的な研究が必要とされる。</p>		
2 委員会・研修会での成果活用	<p>有志による研修会を開催し、運動形成の五位相の理解と授業への導入を見越した学習会を行っている。しかしながら、運動形成の安易な授業への導入は、その本意との乖離が予測されるので、十分にその意図を理解した上で行うことが必要である。</p> <p>区部や市部での体育研究会等で講師を務めることにより、派遣研修での成果を広めるとともに、体育学習の発展に寄与する。</p> <p>また、東京都小学校体育研究会・基本の運動領域部会においては、副部長を務め、派遣研修で学んだ内容を適時紹介し、その運営発展に寄与している。</p>		

<p>3 成 果 を 生 か し た 研 究 授 業 等</p>	<p>世田谷区小学校体育研究会、東京都小学校体育研究会において行われた授業に際し、派遣研修で得られた知見を紹介している。</p> <p>また、東京教師養成塾の塾生に対する研究授業公開と講義を行った。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p>指導事例：マット運動（7時間扱い）</p> <p>学習の前半でのねらいを「今もっている力でマット運動を楽しむ」とし、後半でのねらいを「もう少しでできそうな技に取り組む」とした。</p> <p>前半の学習では、友だちと動きを合わせて回転する「シンクロ前転」「シンクロ後転」や、今できる技をさらに上手にするための練習を児童が選択して行った。これにより、マット運動が苦手な児童でも、今の力でマット運動を楽しみに触れることができた。</p> <p>後半の学習では、もう少しでできそうな技をめあてとして練習に取り組む時間とした。教師は、児童のめあてが適切かどうか判断し、めあてとした技ができるようにするための支援を行った。特に、児童の運動感覚能力を知ることでできない原因を探り、その部分に立ち返って練習を行う方法が効果的であった。</p> </div>
<p>4 今 後 の 活 用 計 画 等</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○本研究を継続していくことで、形成位相の識別を器械運動の他の技でもできるようにする。それにより、形成位相の概念を取り入れた体育の学習を広めていくように努力する。 ○校内の教員にも自らの授業を公開するとともに、体育の授業に関する指導を積極的に行っていく。 ○器械運動をはじめ体育の授業を公開し、充実した体育授業が全校的に行われるように努力する。 ○各種研究会等で講師を務め、派遣研修の成果を広めていくようにする。